



1915

『トクシマ・アンツアイガー』 第2巻

第15号

徳島

1916年1月1日

1915年

血と鉄の一年が暮れた。昨日終わった年を今日少し振り返ってみると、世の中でこれほど多くの戦死者を出した年はないか。かつてなかったろう。

ここでは、1915年という戦争の年の物語を記すというのではなく、ただ年の始めと終りの戦争状況を手短かに明らかにしておきたい。

1915年、西部ではわれわれの戦線にほとんど変化はなかった。何はさて置き、われわれは、1914年にベルギーとフランスで征服したものを防衛することだけに専念した。西部戦線でのわれわれの陣地にほとんど変化

はなかった。そのことは、この戦場でわれわれが無事であったことを意味しないだろう。正確に言えば、1915年という年は、フランスで365日の戦いがあった年である。われわれはここでもたくさんの勝利を書き留めなくてはならない。そうしたことに数えられるのだが、いろいろな所で行われたフランスとイギリスの大規模な攻勢を食い止めたことも重要な勝利とみなしてよいであろう。われわれは、以前から吹聴されている敵の戦果を奪い取ったばかりか、われわれの損失の何倍もの手酷い打撃を敵に与え、そのことによって彼らは軍事的に非常に弱体化している。

しかし、その年の主な戦果は東部で獲得された。そこではほとんど一年中ロシアとの激しい戦いが展開され、大胆この上ない望み以上の戦果が得られた。その年度当初、われわれの軍とオーストリア・ハンガリー軍はドイツ国境から遠くないポーランドとカルパチア山脈に駐留していたので、ガリチアのほぼ全域がロシアの手中にあった。5月初め、バルト海地方で新たな作戦が開始されるのとほぼ時を同じくして、戦線の南西ではきわめて勇猛果敢な攻勢が展開され、強力なロシアの戦線は打ち破れた。今や、何百万ものロシア軍の止まる所を知らない退却が始まった。彼らはある陣地から追い払われて別の陣地へ逃げ込み、要塞は次々に降伏しなければならなかった。つまり、最も堅固な敵の要塞も抵抗らしい抵抗を行うことができなかつたのである。デューナ川の背後で、ロキトノ湿地で、ステイリ川とゼーレト川の辺で初めてわれわれの進撃は止まった。ロシア領ポーランドとクールラントは全てわれわれの手に落ちた。ロシア人は再びガリチアの全土から一掃された。領土獲得の他に、捕虜となった軍全てとあらゆる種類のきわめてたくさんの戦利品が賞として勝者に与えられた。しかし、ロシアの抵抗はなお打ち破れなかつた。もっと大きな課題が東部の戦場でもわれわれを待ち受けていた。

ロシア戦線が突破されたのとほぼ時を同じくして、新しい戦争の舞台が幕を開けた。われわれ三国同盟の比較的早くからの同志であるイタリアが背信的な方法でオーストリアを攻撃したので、オーストリアはイタリアを

相手に全ての国境に配備を行わざるを得なかった。当然のことながらまず第一に、オーストリア人はこの戦争をただ防衛戦争として戦ったのである。そして、イタリア人は進撃を明らかに企てているのにもかかわらず、はじめから防衛を計画した陣地に今日でもなお勇敢な部隊は駐留し続けいている。イソントォ戦線で彼らは単独で四度にわたる大規模な攻勢をかけ、ほぼ30万人の死傷者を出したのだった。

やがてわれわれの側に付いたブルガリア人と一緒に、その年の最後の数か月にわれわれはセルビアとモンテネグロに対し、準備周到な作戦行動を開始したが、これは今日ではまず片が付いていると考えて良い。セルビアのほとんど全てがわれわれ同盟国の手に落ちた。セルビアに派遣されたイギリスとフランスの援助部隊はギリシア国境の向う側へ撃退された。まさにこの新しい作戦行動は、まずもってイギリスに対して向けられた新たな激しい企ての開始となるであろう。

われわれの忠実な同盟仲間であるトルコ人は、コーカサスのロシア人からもダーダネルス海峡にいるイギリス人とフランス人からも、大いなる勇気を発揮し成功裡にわが身を守った。丁度その年の最後の数日間に、敵の部隊がスルバ・バイ前線から撤収したという報告を受けた。そこで、非常に多くの敵が犠牲となったダーダネルス海峡は再び全てトルコ人の手に戻ることを期待してよかろう。

1915年という戦争の年を総括するならば、われわれの部隊が成し遂げたことに対して完全に満足することができると胸を張って言えるだろう。

演 劇

クリスマス休日の二日目に、われわれの一座は二番目の戯曲である H. ブルトハウプトの喜劇『活人画』を上演した。

ストーリーの展開は以下の通りである。教授は内気な性質の甥が（、）自

分の初恋の人で今は寡婦となっているフォン・ヴァルトシュテッテン男爵夫人の娘を好きになったのを見抜き、その若者が内気さを乗り越えるのを助けようと決心した。男爵夫人が祭りに向けて活人画を描こうとした男爵夫人が彼に芸術上の指導を求めてきたとき、チャンスが訪れた。その画を描く際に彼は甥を助手に雇い、甥が若き男爵令嬢と一緒に活人画を描く手筈を整えようとした。そして彼は、傍目にもはっきりとわかる程気持ちよさそうに男爵夫人の視線を楽しんだのだった。助手と自分の娘が引き合わされたことに、男爵夫人は貴族としての身分感情が傷つけられたのを知らねばならなかった。彼はかつて軽蔑され拒絶された愛に対して男爵夫人に復讐する一方、当初は見込みのなかった若い恋人同士の関係を思いがけない幸せな、喜劇のなかでは有効な結果に終わらせた。教授は昔の愛が再び甦ったのを感じ、新たに目醒めた愛の炎のなかで男爵夫人に自分の気持ちを打ち明けたのであった。こうして、戯曲は二つの幸せなカップルを目撃して終わる。戯曲のなかで、登場人物について真相を知らせないで曖昧にしておく方法、すなわちブルトハウプトが理解していた方法は、喜劇のなかのドラマチックな纏れに対する彼の並々ならぬ才能をはっきりと示している。自分の計画を世間に知らしめるために、すでにわれわれがこの前の号で指摘した芸術論にしたがいながら、彼は比較的古い劇作家の作風や、独自の傍白、そして近代をすでにより良く補っている手段、これらを用いているのである。

上演は戯曲の良さにふさわしいものであった！演技の全ての要素である役割についての見解、言葉の取り扱い方、身振り、自然さ、舞台の上での動き、これらは全ての俳優の豊かな才能に加えて、丹精を込め全身全霊で専門家的な優れた訓練を行った結果もたらされたものである。したがって、戯曲は完璧な舞台成果をあげたと言えることができる。われわれの若き部隊の新しい重要人物として、フォン・ヴァルトシュテッテン男爵夫人役の二等水兵カンプツィク、ロレンハーゲン教授役の一等砲兵ホルトキャンプ、テレゼ役の一等砲兵シュマーレンバッハ、ヘルマン役の志願兵ケンプフ、

ヤーコブ役の二等砲兵キステンブリュッガーに対し、われわれは誇りをもって挨拶することができた。この素晴らしい成果をもたらした彼らに、いっそうの拍手を送りたい。

第3回演劇の夕べ

徳島 1916年1月1日

ローデリッヒ・ベネディクス

『下僕たち』

一幕の喜劇

登場人物

| | |
|----------|---------|
| アウグスト | 近侍 |
| クリスティアーネ | 女性料理人 |
| アントワネット | 侍女 |
| ブッシュマン | 御者 |
| フィリップ | 厩務員 |
| ハンヒェン | 小間使い |
| アンドレアス | パン屋の従弟 |
| グレーチェン | 乳しぼりの少女 |
| ハンス | 肉屋の若者 |

舞台：主人の館の台所

8時開始

上演時間、およそ1時間

その戯曲の初演は、1857年3月23日にベルリンの王立劇場で行われた。これはまさに作者独特の作品である！戯曲の登場人物である「差し脚忍び足で進み、お世辞を言う」近侍、実直な若い娘料理人、高慢でかわいい

侍女等々は、「やさしい親類の人びと」、「女嫌いの男」、高貴な恋人を持つチャーミングな娘といった人びとの世界へとわれわれを誘い、性質の悪い姑は愛の幸せを妨害し、若き未亡人はプラトニックな若者を思い焦がれる。ここは作者なじみの世界であり、そこを基盤に詩的創造を膨らませる。そのことによって必ずしも文学的価値が生まれるとは限らないが、しかしこの月並みな凡人たちの狭い生活空間を描く方法は非常に愛らしくて、善良なベネディクスに腹を立てることができないほどである。楽しそうな足取りで反っくり返って歩き、われわれを幾度となくそうした風変わりな人物の虜にしてしまう途方もない物語を耳にすると笑わざるを得ず、結局、一晚を愉快かつ無邪気に楽しくわれわれは過ごしたのだった。

その詩人の生活と人となりについて語れることはそう多くない。彼は1811年から1873年まで生存した。彼の生涯を詳しく描写するにあたり、文筆家としての意義はほとんどない。文学史上彼の名は、二人のオーストリアの作家、フェンディナント・レイムントとエドワード・フォン・バウエルンフェルトと共に挙げられているが、しかし重要さの点で彼よりも二人はずっと高く評価されることができる。ベネディクスのその他の戯曲は「雀蜂博士」、「古株の大学生」、「新婚旅行」、「優しい親類の人びと」等々であり、それら全てが楽しい愉快な夕べに上演するに相応しい。後でもう一度、われわれは演劇計画のなかでこの戯曲をきっと上演するであろう。それらが大当たりすることは確実であると、前もって言うことができる。

1916年1月1日午後4時、舞台でリハーサルするため大広間から退出するよう願います。

プログラムの販売は前回までと同様です。

演劇部

クリスマスを祝う催しについて

クリスマス・イブの5時30分、クリスマスを祝う催しが始まった。大広間の中央に置かれた大きなクリスマス・ツリーのロウソクに点火され、ドアが開いた。すると入場者たちの目にとび込んできたのは、豪華に飾られた大広間、光り輝くクリスマス・ツリー、非常にたくさんの贈り物で溢れた長机といった盛大かつ大きな期待をいだかせる光景であった。

礼拝とともに祝典がはじまった。われわれ全員の心のこもった昔ながらのクリスマス・ソングが歌われ、デムラー海軍大尉殿が比較的長いスピーチを行った。次いで、その祝典の主催者であるポイトナー少尉殿の思いがけない嬉しい贈りものがあった。彼は密かにルードヴィヒ・トーマのちょっとしたクリスマス劇を準備していたのである。塹壕のなかで上演されたその劇は、故郷にいるわれわれの勇敢な兄弟たちの気持ちを飾り気なくかつ感動的に映し出していた。戯曲は見事に上演された。大尉役の砲兵隊二等砲兵オール、バイエルン後備兵役の砲兵隊一等砲兵アウエルと砲兵隊二等砲兵Fl. ケラー、少尉役の砲兵隊一等砲兵R. ケラーは、拍手を受けるに相応しい演技を行った。

贈り物をのせたテーブルには、われわれの同郷の人びとの愛情と善意がとてもしっかりと積まれていた。援助委員会は皆のためにビール、リンゴ、お菓子、燻製の魚を贈ってくれた。それに加えて、なお多くの心のこもった物品が贈られてきた。それらは、神戸と香港の婦人協会、青島にいるわれわれの同郷の人びとが寄贈した物品である。

そこで、各人はそれぞれの場で贈り物の大きな山を目の当たりにすることができた。故郷からの荷物のこなかった人たちには特に配慮がなされた。

祝日一日目の午後、コンサートが開かれた。その中心となる曲目は、われわれの指揮者であるハンゼン一等軍楽兵曹殿が編曲したクリスマス・メドレー曲であった。それは、翌日にも再演奏されねばならない程の大きな喝采を博した。合唱とオーケストラによって演奏された『美しく青きドナ

ウ』というワルツも、特にわれわれのお気に入りであった。

祝日二日目には劇が上演された。それは別の場所で詳しく取り扱われている。目新しかったのは、続いて行われた『映画館』であった。それは二、三人の器用な人たちによって作り上げられ、大きな喝采を博した。希望なのだが、それはもっともっと改善されると、まどわり付いている技倆不足もやがて解消されるであろう。

日本の正月

正月は日本の主要な祝祭日である。かつては中国と同様、それは2月中旬あるいは下旬に祝われた。正月は春の開始と重なり、国民のあらゆる種類の娯楽を促すきっかけとなった。ヨーロッパの暦が導入され、国の近代化が進むと、季節や新しい客観的な意味にそぐわない多くの習慣は消滅した。

われわれは、徳島のいたるところで正月の準備が行われていることに気づくことができた。路上では、餅屋が拍子に合わせて杵を振りかざし餅をつく。家々の玄関前には、松や竹の幹でつくられた門松が飾られる。玄関の上には、羊歯、一匹の伊勢海老、木炭付きの標縄が掛けられている。羊歯は清潔さを、伊勢海老は長寿を、木炭は不変を意味する。古い葉はすっかり落ち、新しい葉を既に付けているユズリハの枝も標縄にしばしば編み込まれる。それらは、子や孫を通して後世に伝えられる家族のシンボルだそう。同じような標縄が井戸と竈の上にも掛けられている。当然、老いも若きもその日の祝典のために晴れ着を着る。人びとは祭りの菓子と呼ばれるお米の菓子である餅を食べ、お祭りの飲み物として特に香しい香りのする酒である屠蘇を飲む。しかも大量に。だから、本当のお祭り気分は生じない。祝いの挨拶に訪れる客のために、来客部屋が用意される。その部屋のくぼみとなっている床の間には、餅、伊勢海老、柿の載った小さな机、

さらに、重ね合わせて置かれた三つの盃、酒瓶のかわりに正月に使用される酒爛が置かれる。床の間の壁には、その日の意義に相応しい絵である掛け軸が掛けられる。人びとは丸三日間にわたって祝う。娘たちは路上で羽子突きをし、男の子たちは矢と弓、あるいは凧で遊ぶ。人びとは家のなかでは百人一首という歌留多遊びで時間をつぶす。

兵士たちは年末の12月29日に大掃除を行い、30日と31日は既に勤務のない日である。元日には将校のために将校食堂でごく簡単な食事のみが提供され、その後彼らは互いに訪問しあう。

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第73問の解答

1. Tf4 - f2 任意の手
2. D,T,S いずれかで詰み

第74問の解答

1. Te6 - e5 Kc5 - d4
2. Dk6 - g6 Kd4 x e5 あるいは任意
3. Se7 - c6 か D,T で詰み

正解を寄せたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第75問

白：Kd1, Dh8, Tb1, e7, Lg1, Sb6, Sf4, Ba3, a4, h3

黒：Kc3, Sd4, e5, Bb7, d5, d6

2手詰め

第76問

白：Kf5, Ta1, La4, Sd6, e3, Bb4, c2

黒：Kd4, Ta8, Sh8, Bb5, c3, e4, f7

3手詰め

汽船「フロリダ号」の沈没（2）

そうこうするうちに、ドイツの補助巡洋艦から夥しい数のボートがこちらへやって来た。というのは、「フロリダ号」に数百人の乗組員が乗っていたからである。フランス人の乗組員はその船の前方甲板に集められた。彼らと乗客に対し、こう告げられた。「個人の持ち物は全て携帯してよい。この船に付属するものは皆、戦利品である」と。持ち物の行方については一安心だったので、われわれのもっと大きな心配事は間近に迫っている運命だった。いったいわれわれはどうなるのだろうか？多分筏の上で赤道の灼熱の太陽に晒され、われわれはジュール・ヴェルヌの小説に出てくる英雄のような冒険をしなければならないのだろうか。われわれは最終的に、「アイテル・フリードリッヒ王子号」に乗るという体験をすることになった。やれやれだ。昼頃、一等クラスの乗客に対し、「アイテル・フリードリッヒ王子号」に乗船するよう命令が下った。全ての荷物は携帯して構わなかった。

「アイテル・フリードリッヒ王子号」の船上で、士官はわれわれを非常に礼儀正しく取り扱う旨の挨拶をした。われわれはほとんど休んでいなかったのだから、艦長自身はごく手短な挨拶に留めたように思われる。彼は大柄で上品な人物で、髭をつるつるに剃っていた。われわれは極度に緊張して、彼の短いスピーチを聞いた。彼は戦争の痛ましい必然性について語り、あなた方は恐らく数週間、自分の客となることを強られる、とわれわれに告げた。彼が述べたこと全ては、この上なく礼儀正しいものがあった。艦長はわれわれの気に入られたいと思い、艦上では希望を持つことが可能だと述べ、われわれを安心させようとした！われわれはこの上なく十分に休み、美容室や喫煙室等を自由に使用した。やがて、第二クラスと第三クラスの乗客、そして最後に「フロリダ号」の乗組員がやって来た。非常に素早い動作でドイツ人は「フロリダ号」からまだ使えるもの全てを取り外した。それから夕方6時にはもうその船は沈没し始めた。焼夷弾によって「フ

ロリダ号」に火が付けられた。凡そ8時間、その船は燃えさかる巨大な松明のような不気味な美しい姿となり、およそ朝の2時頃、燃え上がる火柱となって海中深く沈んでいった。その後ようやくドイツ人たちは航行を始めた。翌朝、驚いたことに、われわれはアメリカの「W. P. フリーン号」の高級船員たちと乗客に出会った。彼らは中立国としての資格を持っていたので、特別に配慮して取り扱われた。

塹壕のなかのクリスマス・イブ

宿舎にいる私の同志たちは、居心地の良い快適な宿舎である四方が間仕切りのある中で、クリスマスを祝う準備をしている。しかし、そのことは現在の私には叶いそうもない。すなわち、暖かい部屋でのクリスマスは。そこで、私はクリスマスを塹壕のなかで過ごす決心をした。われわれの近くにいる後備兵歩兵連隊の指揮官は、私が彼の塹壕を訪問することを許しただけではない。むしろ、そこへ彼と彼の副官を護衛することを認めてくれた。

われわれはかなりの道のりを歩いた時に、突然に歌声が聞こえてきた。最初は微かに、そして次にはずっと大きく膨らみながら。われわれは立ち止まって耳を傾けた。今やわれわれは、「私はプロイセン人だ、プロイセン人でありたい！」という歌声をはっきりと聞いた。歌い手は誰だったのだろうか？彼らはどこに留まっていたのだろうか？その歌い手は塹壕のなかの後備兵だった。彼らは歌声によってクリスマス気分を表していたのである。それから暫くして、別の場所から別のメロディーが聞こえてきた。そしてわれわれがもっと近づいた時、何を歌っているのかははっきりと聞くことができ、われわれは暫くの間金縛りにあったようになった。一見して荒涼とした殺風景な冬の道路に、熱心で敬虔な歌声が響き渡った。今、愛の祝祭というクリスマス・イブに、激しい「デ・プロフンディス（深き淵よ

り)」のように、地球の深い溝から響いてきた。「私は愛の力に祈る！」という歌声が。

それは空白の、心を打つ、いつまでも忘れられない瞬間であった！

だが、中佐は感動することを許さなかった。もうこれ以上歌うなどの命令を携えた伝令兵を彼は向こう側へ送った。私は一たとえいやいやであったにせよ—この措置が必要なことを理解した。敵がわれわれのすぐ近くにやって来ていて、今日は塹壕で何か特別なことが起こるはずであり、まさに攻撃のしがいのある日だといった考えを彼らに起こされてはならなかったからである。

遂に、われわれはその連隊の塹壕がスタートした地点に到着した。そして、今やわれわれはクリスマスの遠足を始めたのである。クリスマスのだって？私は今、地下壕のあちこちできらきら光る木々を眺めるのを思い描いた。木々はそこにあった。しかし、いかなるクリスマスの光も私の方には輝かなかつたし、どんな樅の木の新緑もわれわれを包みこみはしなかつた。暗く、真っ黒に塹壕が地面を曲がりくねっていた。冷たい風がこげ臭い匂いをわれわれのところへ運んで来た一勢いよく燃え上がり、明るい炎の光によって遠くまで眺めることができる先の農家からその臭いはやって来た。クリスマスの光もまたやって来た！

今塹壕の中にいるにもかかわらず、クリスマスらしくなった。真面目で、静かな、印象深い祭典が始まった。中佐はゆっくりと前進しながら、今しがたわれわれが傍を通り過ぎた中隊の若干の兵士を密かに集結し、塹壕の縁に立って中隊それぞれに短い真剣な挨拶をした。彼は部下に次のように指摘した。君たちは今日ここで見張りを行うよう任命されているので、故郷では妻と子が妨げられることなくクリスマス・ツリーに点火することができるのだ、と。間近に迫った最終的な勝利と素晴らしい平和への希望を、そしてまた近い将来の楽しいクリスマスへの希望を彼は表明した。「今日は、クリスマス・ツリーに点火するのをじっと我慢しなければならない。また声を大きくしたり、歌ったりしてはいけない。向う側にいる奴等は、

今日われわれを奇襲することができるかと恐らく考えているにちがいない。だが、それは思い違いというものだ。私は確信しているのだが、彼らがやってくるならば君たちは彼らにまさに心のこもった歓迎を行うであろう！」

おそらくこの意味において、連隊長は個々の中隊に挨拶をした。彼らが連隊長と心をつにしていることは、見ていて明らかだった。そして、このクリスマスがドイツ兵に贈り得る最も素晴らしい貴重な贈り物が、すなわち鉄十字勲章が中隊の兵士一人一人に授与されるすてきな瞬間がやって来た。このクリスマスの贈り物が何人かの兵士に贈呈されたのは、下に立っている同志たちの目の前のここ塹壕の縁においてであったが、彼らは大きな感動に包まれた。というのは、連隊長が心のこもった言葉を述べながら彼ら兵士と握手することによって、彼らは見習うべき大きな目標であると他の兵士たちに思わせたからである。そのようなクリスマスは、きっとこの上なく素晴らしいものとして生涯いつまでも忘れられないであろう！

手紙 (11)

フランスのHより

愛するアンナ！

僕は希望したい。僕と同じように君が元気であることを。すなわちこの前以降、これは世界大戦なんかではなくハネムーンだと僕は独り言が言えるような快適な時間を過ごした。そして君は知るにちがいない。君に知ってもらいたいが、われわれは時々フランスですごいお祭り騒ぎをやった。これは、かつて作り上げた詩人が「兵士の生活はすごい！愉快だ！」とのすてきな言葉を作って書き表したことだ。

というのは、中尉殿は今日誕生日を迎えるので、昨日の夕方、「クネチュケ、私は宴会を催したい。そこでそのトルコを屠殺してくれたまえ！」と述べたからである。愛するアンナ！それは豚だったのだ。凍えた状態だっ

たので、われわれの進軍部隊が憐れみながら捕えた豚だったのだ。われわれはその豚にトルコ風の上着と帯革を支給した。それによって、豚は非常に滑稽な姿となった。そしてトルコという名前を与えた。僕は、その豚を射殺するため荷車をもって向うへ行った。だが、豚は僕の考えを見抜き、逃げ回った。そこで、弾丸は豚の背中をかすめただけだった。愛する友よ、おそらくこれはひどい話なのだ。というのは、僕は君に書かなければならない。豚は銃声と掠り傷のために大きな不安にかられたということ。豚はわれわれの一年志願兵めがけて突進した。ストーブで乾かすために、丁度ズボン脱いでいたわれわれの一年志願兵めがけて。そこで、その一年志願兵はひっくり返って、ぐるぐる巻いてある有刺鉄線の上に乗った。それは決して快い気分になれるようなものではなかった。君の部屋でそうした実験をいつかしてみたまえ。愛するアンナ！そうした実験を誰も見ていない時に。

それから豚はこの出来事の後われわれの食糧部屋へ逃げ込み、そこで缶詰の缶を用いて非常に激しい大活劇を演じた。僕はそのあと食糧部屋に入り、豚を捕獲するための木箱を入口に置いた。だが、その豚が捕獲器で捕まる程頓馬だと君はほぼ信じまい。事実、豚は燕のように木箱を越え、あつという間に塹壕に沿って逃げて行ってしまった。そこで、僕は早速その後を追うことを開始した。復讐心に燃えた一年志願兵もまたしかり。この出来事をジョッフレ¹ 司令官が見ていたらきっとこの上なく上機嫌となり、これは君たちに対する罰だ！と独り言を言っただろう。というのは、野戦炊事車がわれわれに榮譽を与えるために豆入りスープを作り、まさに丁度食事当番がそのスープに手をのぼしたところだったからだ。そこへ、食事当番の間に豚が分け入ったため、人の体よりももっと大きな塊が生じた。愛するアンナ！豆入りスープよりももっと大きな塊の山が生じたのだ。何も僕は君を騙そうとしているのではない。そうではなく、僕もその塊の山のなかに巻き込まれてしまったのだ。一年志願兵もろとも。その時、塊の山

1 ジョッフルのドイツ語訛り

のなかでは上品な語らいがあったなど君は考えまい。というのは、その食事当番は僕に対し書き記すことができないような教養のない言葉を口にしたからである。愛するアンナ！君はもうわかっている。だから僕は今豚を捕えて死を授けんがために、素早くその塊の山から抜け出た。しかし、豚はさらに逃げて、楽隊のところへ向かったので連中の激しい怒りを買った。というのも、豚は二つのドラムを踏みつぶしたからである。大ティンパニーもである。そこで、僕はどのようにしたらまた豚を音楽室から外に出せるかを思いめぐらしたそして僕は、豚がちょうど音楽室から外に出てくるところに行った。そこで頭にいくつか瘤をつくってしまった、というのも楽隊の連中が豚の背後に向けてドラムステッキを投げつけてきたからなのだ。

僕の愛するアンナ！おそらく、僕は今カッとなってしまい何をしたのか分からなくなった。というのは、その畜生が少佐殿の部屋のなかへ走りこんだことは僕にはどうでもよいことだからだ。すなわち、いつもなら兵士はそこで立ち止り、こんな場所に入ってはだめだ、と独り言を言うところだ。だが、僕は見境のない怒りでいっぱいになっていたので、豚の後を追いかけた。一年志願兵も一緒にそうした。これはまずいことであった。なぜなら、少佐殿が軍医殿を招いて、夕食を共にしていたからである。そこで、君はもしこの報告を読んだとしたら、きっと驚くことだろう。というのは、豚が夕食をとっているテーブルめがけて突進したからである。そこで、少佐殿は豆入りスープを被って汚れてしまった。軍医殿も保存用に漬けたロールモップス²を被って汚れてしまった。

愛するアンナ！もうすでにランプは消え、漆黒の暗闇となった。これは危険な状態だった。というのは、僕は豚を捕まえようとして、軍医殿の鼻を摘んでしまったからだ。彼が鼻風邪をひいているのが僕にはすぐに分かった。彼にはロールモップスの臭いがした。僕はびっくりして後へひっくり返ったところへ、誰かが腹を踏ん付けたので僕は胸焼けがした。

2 酢漬け巻きニシン

愛するアンナ！また誰かが僕の顔の上にどっかりと座った。彼には豆入りスープの臭いがしたので僕は自制心から黙っていた。ここで少佐殿がスピーチをしたのだが、そのときこれは榴弾の雨よりももっと醜い、と心の中で思ったことを君に報告したい。それによって部屋のなかの沈黙は破られ、豚はキーキーと激しく鳴いた。そこへ下士官がやって来て、ランタンを手にかざし、どうして悪魔が解き放たれたのかを確認した。多分、少佐殿の部屋を見舞ったこれほどのことはおそらく誰も見たことがないだろう。それにしても、一年志願兵が豚を捕まえたのは幸運だった。豚は片方のアイスバイン³を2本の柱に挟みこんでしまい、一年志願兵は両足を二本の柱に突っ張って豚のアイスバインを思い切り引っ張ったのだった。

愛するアンナ！おそらくその光景を見る者はこの上なく楽しい気分になり、大笑いするだろう。というのは、一年志願兵はズボンを穿いておらず、豚はトルコ風ヤッケを着ていたのだから。しかし、ドイツ兵というのは、どんな命令も受けていないのに大笑いするということはない。そこで、われわれは少佐殿に事務的な顔つきをしたのだった。しかし、少佐殿は一年志願兵をじっと見つめたので、彼の顔色が青く変わった。すると、突然、少佐殿は大きな声で笑い出したので、僕は「これはいいや！」とすぐに独り言を言った。僕は今君に嬉しい報告をしたい。豚のおかげでわれわれの塹壕では非常に楽しい気分が生まれたということ。また、新鮮なソーセージと骨付き筋肉の報告もしたい。もし君がこの便箋を眺める時、われわれは贅沢な暮らしをしているときと思うだろう。僕はブラッドソーセージを手にとり、「残念ながらアンナ、君はこれを食べれないのだ」と静かに独り言を言って終わりにしたい。恭しいキスで

心から親愛なる君の

ハインリッヒ・クネチュケ

3 塩漬けの骨付き豚スネ肉を調理したもの



新年おめでとう！



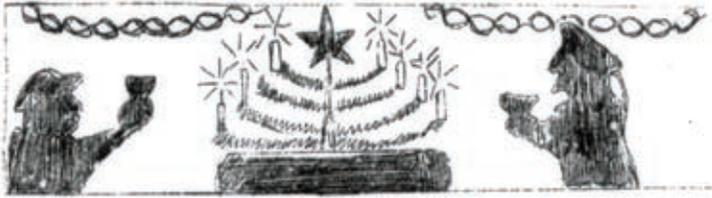
森の小鳥たちは非常にきれいな声でクリスマスの賑わいを歌っている！故郷では再会がある

最善を尽くし美しく飾ったのは
クリスマスのために収容所
紙から鎖をつくり
幾人かは工夫をこらして横断幕を考案し
そしてランプも感じよくつつみ込む
見やるべきはスクリーン
ここに住むは故郷
窓は色取り取りの紙で飾られ
そしてやさしく光り輝く
夜の中を遠くまで光りながら。
別のものは芸術的なスケッチをし
汽船がそっくりに描けているのを示す
故郷の三角旗は長くて重く
遙か水のなかへと垂れ下がっている
次いで、別の側に
鉄道も見える。
それら二つの姿が
望むらくは、やがてわれわれを運び給え
故郷へと。そうすれば、そこでは、素晴らしいことに



うれしい再会がある。

誰かが考え出したと言われている祝祭は
思いがけないうれしい贈り物をたくさん運んで来た
古くからの歌が聞こえてきた後で
いつも耳にして何度も喜ぶのは
「きよしこの夜」
それを天使の姿をした子どもがかつて届けてくれた、
周知のように、天井高くからここへ僕は降りて来て、
そして他の素晴らしい詩をもっとたくさん
家にいるわれわれのところにも届けてくれる
サンタクロースが姿を現さないことはなく、
塹壕のなかへのやって来る、
愛の贈り物を持って来る。
彼はわれわれのことを忘れはしない
そのことを、そうこうするうちに人は確かに気づいた。
長いテーブルの上に置くべく
贈り物をたくさん選んだ、
しかし、彼は一人一人のことを考え
多くの物を持って来た。



親密な家族のなかでは
誰でも自分のやり方を求める
パンチやその他の素晴らしい事で
時を愉快地に過ごすために
時間が飛ぶように非常に早く過ぎる。1, 2, 3で
祝日はもう終わった。

そこで僕はもっと長く記すことができよう
全てのこうしたクリスマスの喜びについて
大メドレー曲について：
天上高くからここへその喜びは降りて来る
一頭の馬が現われ
下僕ループレヒトがやって来た！
ここにいるのは盲目のパイプオルガン奏者、
クリスマスのプレゼントの山、それから大きな喜び。
静かな夜、聖歌隊管楽器奏者が
高い教会の塔から演奏をわれわれに披露する
君は愉快的、ああこの上なく幸せな時を。
この辺り一帯では子どもたちが大喜びだ
チターソロを演奏するのは父



おちびのグレーテ！は母の腕のなかで夢を見る。

雪が聖夜に降り

その時は昼間教会へ礼拝に行く。

パレードが生き生きと通りかかり

おじいちゃんは考える、おや、おや、おや、

彼はちょっとの間昼寝をし

その後、そりで行くことを考える

さっそく村に近づくと

フン・タッタというダンス音楽が奏でられ

喝采とホルドリオという歓声が上がっているところで

多くの人びとが愉快地楽しく時を過ごす。

帰郷、そして終了、さあそろそろ

幸せをもたらすクリスマスの時期だ。





二日目にこちらへ持って来たのは
芝居ともっとたくさんの物
テレゼ嬢、ひとりの娘
ヘルマン氏は彼女の婚約者だと名乗る。
バローニン婦人は見た目は親切で
おあつらえ向きのドレスを着てござっぱりしている
加えてローレンハーゲン教授は
燕尾服を着ている、僕は言うことができる
ここでは映画館もあり
人びとに多くの楽しみを与えている、と。
要するに、祝日は
われわれに多くの楽しみを運んでくれた。
時は過ぎ去り、終わりがやって来た
そこで、われわれは跳躍する

新年へ！